

翻訳：ジョン・クロファード著
『インド総督よりシャムおよびコーチシナの宮廷に
派遣された使節団の日誌』第4章

清信 巴菜、金子 早苗、野口 依帆里、堤 日和、
吉田 真友、細矢 かれん、野上 袖月、前村 知里、
西山 依吹、王子田 莉奈、岡野 さえら、増田 聖奈、
外山 美羽、池田 彩乃、近藤 夕香、北川 香子

* 本稿は、2022年度外国語演習Pの授業で取り上げた、Crawford, John. 2000. *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin China; Exhibiting a View of the Actual State of Those Kingdoms*. Asian Educational Services. New Delhi. (Reprint. Originally published: Henry Colburn, London, 1828.) 第4章の全文訳である。

3月24日：我々は停泊するや否や、ブラ・克蘭Prah-klang¹、すなわち外国人に関する事柄を担当する大臣への手紙を準備した。そのなかで我々は、我々の到着、我々の一行の人数、その他要求されるであろう詳細を、簡潔に彼に知らせた。これは昨日早朝に、船の士官の1人が、川をさかのぼる際の最初の要港である、パクナムPak-nam²へ運んだ。士官は今朝、パクナムの長からの丁寧なメッセージを持って戻ってきた。それには果物の贈り物が添えられていた。彼はまた、我々が砂州を乗り越える際の案内をするための水先案内人を伴ってきた。

3月25日：今朝7時に我々は錨を上げ、砂州の横断を試みた。しかし、半ばを越えたあたりで、船は柔らかい泥の中に座礁し、その状態のまま、潮が下がるにつれて4フィート沈んだ。当時、水深は4フィート以下であった。夕方の潮で船は浮き上がり、我々は何の損害も被ることなく砂州を越えた。強い順風によって、我々はやがて、砂州の外縁から10マイル強の距離にあるメナムMenam〔チャオプラヤー川〕の河口まで運ばれ、水っばい泥の中を、ずっと耕すようにして進んでいった。そして夜7時、河口から2マイ

¹ 文字通り、倉庫の主。

² この単語は、川、というよりはむしろ、水の口を意味する。おしなべて川の河口を指して用いられる。

ル半ほど離れた、左岸のパクナム村に錨を下ろした。

3月26日：今朝、宮廷から派遣されたポルトガル人の通訳が乗船した。彼はパクナムの長からのメッセージを携えていた。その趣旨は、宮廷から我々をもてなすようにという指示があり、また我々を王都に連れて行くための御座船bargeが送られてきているが、慣例に従って、船を進める前に、我々の砲を陸揚げする必要があるということであった。我々は礼儀正しい返答をし、長にささやかな贈り物を送った。またこの機会を利用して、我々の砲を陸揚げすることに対して抗議し、さらに1隻のボートでは、我々のような大人数の一行を収容するには全く不十分であるということ指摘した。昼前には、我々に応対するために彼の甥が乗船してきた。彼は、外国船の大砲を陸揚げすることに関する政府の命令は絶対で、免除され得ないものであるが、宮廷の指示を問い合わせると述べた。御座船の問題に関しては、我々の一行の人数を知らなかったからで、そうでなければ、もっと大人数を収容できる船が提供されていたはずだと説明された。我々はブラ・クランへの書簡に正確な人数を記しているの、これは事実ではない。また1隻のボートだけしか送らないという状況は、明らかに、使節団Missionとそれを派遣した権威を早々に過小評価しようとする試みであった。従って、不愉快ではあったが、温和な抵抗が必要となった。

我々の客は、我々一行に対する招待状を持ってやってきた。夕方に上陸し、長が我々のために用意してくれた接待に参加するよというのである。いくらかためらった後、我々はこれを承諾した。そして上陸場所では、知事の甥が我々を迎えに来ていて、我々を長の家案内してくれた。男性女性そして子供たちの群れが集まってきた。彼らの好奇心の大部分は、我々のインド人下僕Indian servantsに向けられていたようだった。インド人下僕たちの端正かつ華やかで清潔な服装は、群衆の粗野でだらしない半裸とは極めて対照的だった。小屋がひしめき合った、みすぼらしい、短い小道を通り抜けた先に、知事閣下の住居が現れた。それは他の住居と同じように、みすぼらしく壊れやすい素材で作られていた。我々は大きな建物のなかに案内された。それは地面から数フィートの高さを持ち上げられた、割いた竹の台を床として建てられていた。草屋根の内側が、破れて汚れた中国の壁紙からのぞいていた。そして天井からは、みすぼらしいガラスでできた古いオランダのシャンデリアや、シャムや中国のランプの雑多なコレクションが吊り下げられており、それらは、埃や蜘蛛の巣、油やお香、煙草の煤で覆われていた。知事は戸口で礼儀正しく我々を迎え、ヨーロッパ式に心からの握手をした。我々の座席として椅子が設けられていた。長は45歳くらいの男性で、いかつい顔立ちであったが、態度は陽気で、熱心にもてなそうとしているようだった。知事の甥が我々をなかに案内し、知事の前カーペットの上には彼の書記が座った。我々を案内するために派遣されてきた使節が、ちょうど宮廷から到着したところで、同席していた。この人物の名前、というよりむしろタイトルは、Luang kochai-asa-hakで、以前はナコダNakhoda〔船

長]・アリAliといった。使節団は後に、彼と多くの交流をもつことになった。彼はマホメット教徒Mohammedan〔ムスリム〕の冒険商人の一人で、その祖先たちは数世代前に、コロマンデルCoromandel海岸からやってきた。彼はケダQueda、ペナンPenang、そしてカルカッタCalcuttaを訪れたことがあり、マレー語をかなり話した。これが理由で彼は、我々に随行するよう選ばれたのである。部屋の中央には、皿、ナイフ、フォーク、銀のスプーンとかなり良いイギリスのグラス類が、ポルトガル人通訳の指示によって、ヨーロッパ風に整えられたテーブルがあった。それにはブタ、ニワトリ、アヒル、卵、飯、そして旬のマンゴー、オレンジ、ライチーといった豊富な果物などのごちそうが載せられていた。

部屋の一方の端を横切って吊るされたカーテンが、我々の目に留まった。驚いたことに、その奥には、今は亡きパクナムの長の遺体が安置されていると聞かされた。この人物は、今の長の兄弟であり、午前に我々を訪ねてきた若者の父親でもあった。彼は確かにそのとき、彼の父親が5か月前に亡くなったと言っていた。彼の体はパクナムで防腐処置を施されて正装安置されており、彼の葬式は今月の24日に行われるとも言っていた。しかし我々は招待された食事のあいだ、故人がそこにいる状態でもてなされていたとは思いませんでした。フィンレイソンFinlayson氏とラザーファードRutherford氏は、翌朝上陸したとき、正装安置されている遺体の話に強く好奇心をかきたてられ、あえてそれに関するいくつかの質問をした。彼らの質問を受けた息子は、彼らの質問を決して悪くとらえることはなく、むしろお世辞を言われていると考えた。そして彼はもったいぶることなく、遺体を見るようにと彼らを誘った。遺体は棺の中に横たわっていた。棺は金襴と白布に覆われており、その蓋が外されると、布で何重にも巻かれた遺体が現れた。エジプトのミイラのように、外見上はかなり乾いており、大量の香で覆われていたので、不快なことは何もなかった。

長だけが我々と一緒にテーブルについたが、飲食物には手を付けなかった。彼は、我々の目の前に置かれたごちそうを熱心に勧めた。私の通訳は、長が我々に「たくさん食べなさい、恥ずかしがらないで」と言っていると説明した。シャム人のあいだでは、これは客に対する習慣的なあいさつのようだった。接待のあいだ、使節団の目的に関する質問はなく、私はこの訪問は単に形式的で礼儀上のものだと考えたのだが、それは勘違いだった。食事が終わるや否や、極めて快活に、次々に質問が出された。我々は最初に、使節団の目的は何なのかを率直に尋ねられた。我々は、イギリス国民nationとシャム国民は隣人であり、我々の側としては、両者の間に友好的で頻繁な交流があることが望ましいと思っている、ゆえに我々はそのような交流を求めするために派遣されたのであると、一般的な言葉をもって答えた。これは長を満足させなかった。彼は、我々がこの機会に、宮廷に対してどのような特別な要求をするつもりなのかを述べるように何度も促した。我々は彼の要求に応えることを断った。しかるべき時、場所において、十分な説明をす

ると述べたのである。我々は次に、王のために運んできた贈り物の質と量を述べるよう求められ、長の後ろにひかえた1人の書記が、この件に関して我々が述べたことを記録した。この件が第1の関心事のようであった。我々は極めて一般的な言葉以外ではどんな返答もしないようにはしていたが、抜け目なく忍耐強く、尋問がなされた。私は贈り物のなかいくつもの火器があることを告げた。長はそれらの数を教えて欲しいと請うた。私は数百と言った。彼は、実数はだいたいどれくらいかを教えて欲しいと請うた。私は300か400くらいと付け加えた。返答は、「どちらなのかを言わないと不十分だ」ということだった。私はモスリンやブロード生地、クリスタル、姿見などの詳細から長の関心を逸らし、1頭のイギリス馬に彼の関心を引きつけようと努力した。それは贈り物の1つであった。彼はすぐに、ウマの体高、年齢、色、尾の長さ、そして最後に、どんな吉相あるいは凶相を持つかを尋ねた。我々は、船に戻ったらすぐに、彼が満足するような贈答品のリストを作るよう事務員に指示すると知事に告げて、すべての煩雑事を終わりにした。我々は後に、この種のあらゆる問題に関して、シャムの宮廷とその役人たちが下品で強欲であると知ることになるのであるが、この会話はその最初の、そしてとても良い見本となった。

贈り物についての話し合いの後、長は、バンコクBang-kokに我々を運ぶためのボートをこれほど迅速に派遣してきたのは、シャムの国王陛下の使節団に対する敬意であると、我々に念を押した。そして彼は、王の慈悲深い配慮の印を素直に受け入れ、さらに、船の火器を陸揚げするという慣習に従うよう、我々に懇願した。74人からなる我々の一行を収容するには、1隻のボートでは全く不十分であると、我々は前言を繰り返した。大砲の陸揚げについては、2年前に、ポルトガルの戦艦1隻が首都訪問を許されており、英国政府からの使節団には、同様の好意をもって扱われる権利があると述べた。宮廷の望みに応じるほうがよいことを我々に納得させようと、彼は大いに苦心していたが、我々は執拗に反対した。この話し合いをもって、我々の訪問は終わった。我々が座っていた場所の向かい側にある、中庭の全域を占拠していた下等階級の群衆が見聞きするなかで、この半公式な会話の全体が行われたことは、ヨーロッパの習慣とは極めて対照的だった。人々は実際、大広間の扉際まで押し寄せていた。長は彼らの好奇心を全く気にかけず、一方彼らの側も恭しく、何が起きているのかを聞いていた。

我々がパクナム訪問で見たものは、生活に快適さや合理的な楽しみをもたらす術において、シャム国民が進歩しているという印象を我々に与えるものではなかった。イギリスの農民のコテージは、救貧院の一步手前ではなく、50,000人以上の人々を独裁的に支配しているというパクナムの知事の邸宅よりも、はるかに居心地が良い。

3月28日：パクナム訪問後、船に戻るとすぐに、我々の首都までの乗り物と、大砲の陸揚げに関して、私がこの場所の長に主張したことと同じ内容を記した手紙をブラ・クランに送った。昨日は返事が来なかったが、今朝、休暇でバンコクにいたKo-chai-

sahakが乗船してきて、我々が大砲を載せたまま川を遡ることを宮廷が許可し、また宮廷が提供するボートに乗って行くことを我々が希望するならば、何日かのうちに十分な数の船が送られるであろうと知らせた。最も自由かつ迅速で、都合がよいので、我々は船に乗って川を遡る計画を採用した。そして10時に、我々は潮に逆らって、しかし強い順風を受けて、川を遡り始めた。川幅は、その河口とパクナムの上流までは約1マイルであるが、その直後に半分に減り、そのままほとんど変わることなく、バンコクまでずっと続く。パクナムの向かい側には砂州があり、最低水位の時にはむき出しになる³。その数マイル向こう側には、小さなレンガの要塞の廃墟がある。これはオランダ人が、約1世紀半前、彼らがシャム人と貿易していたときに建てた。川の浸食によって、今は川の流れのなかにあり、高水位のときには沈んでしまう。この2つは容易に回避できるものであったが、河口から首都までのメナム川で唯一の危険物となっている。これらを通り過ぎた後、船は、7から10尋の水がある川の端から端まで動くことができ、土手のすぐ近くまで近づいてくるので、船の帆桁が文字通りに岸上に突き出してしまふ。1時に我々は、川の両岸に1つずつある、石積みの2つの砦に到着した。ここでは川はかなり狭くなっていた。この近隣は、ビルマ人とシャム人のあいだで争われた領土からの難民である、ペグー PegueとラオLaoの人々の居留地で占められている。両方の砦から高く旗が掲げられ、我々が通過するときに、ペグー人の音楽隊がセレナーデを演奏した。ビルマ人あるいはペグー人の衣装を着た、身なりの良い長が、2隻のボートに積まれた果物やその他の飲み物を持ってきて、ここで船に乗り込んできた。

川の近く、そして少なくとも12マイル上流までの土地は、時折その上に氾濫する水の塩分によって、耕作に向かないように見える。この地域全体がマングローブとニッパヤシ *cocos-nypa* で占められており、それらの葉は、熱帯インド *tropical India* の住民たちによって、屋根葺材料として多く使われている。これを超えるとまた、首都に至るまでずっと、川の土手はより高くなり、我々が見通すことができた限りでは、水田から構成される耕作地がいたるところに豊かに広がり、多数の村々が点在し、ヤシや果樹園に囲まれていた。2か月前に稲刈りがなされていたので、地面の上には稲の刈り株があり、そしてそのあいだにたくさんのスイギュウの群れが放牧されていた。これが、そこで見られる唯一の家畜の類であった。この肥沃と勤勉を示す風景は、我々がここ3か月間慣れ親しんできた岩の荒野、山、そして立ち入ることができず利益をもたらさない森とは、対照的に好ましかった。

³ ビルマ人と我々の争いは、シャム人を非常に警戒させたので、その最中に、彼らは本文中に言及した砂州を使って、パクナムを要塞化した。これらの防御施設の上には、約200基の大砲が載せられているといわれており、そのうちのいくつかは良いイギリスの大砲であるが、大多数はバンコクで鑄造された最低の等級の真鍮の大砲である。いくらかの度胸あるいは軍事的な技術を持つ人々の手にかかれば、これらの要塞は首都への侵攻を困難にすることだろう。しかしシャム人の無知と臆病のために、ヨーロッパの船による攻撃に対しては、おそらくそれらは深刻な障害にはならないだろう。

4時に我々は満潮を待って数時間投錨し、この機会をとらえて上陸した。野には様々な種類の鳥が多数いて、我々は首尾よくいくつかの標本をコレクションに追加することができた。我々が出会った現地の人々は、常に我々を親切に受け入れ、不信や臆病さの兆候を全く見せない。潮が満ちるとすぐに、我々は錨を上げ、夜の12時にバンコクの町に到着した。

3月29日：朝になると、全く見慣れない風景が我々の前にあった。メナムの両辺に位置する、シャムの首都である。高い尖塔がつき、しばしば金箔が張られた、数多くの仏陀の寺院が、現地の人々のみすぼらしい小屋やあばら家のあいだで目立っている。そのあいだに多数のヤシの木や、通常の果樹、それから聖なるイチジク (figus religiosa) [菩提樹] が点在している。川の両側には、岸につなぎとめた竹の筏の上に据えられた浮家が1列ある。これらは最も小綺麗かつ最上等の住居であるように見えた。これらは立派な中国人の店で占められていた。これら水棲住居の近くには、最も大きな種類の現地の船が錨を下ろしており、そのなかには中国からちょうど到着したばかりの、大型のジャンク船が多数いた。川面は、あらゆる大きさと種類のボートとカヌーが多数行き来する、忙しい光景を見せていた。このときの船の数の多さが、我々には極めて印象的だった。バンコクには道路はほとんどなく、川と運河が、商品だけではなく、あらゆる等級の乗客のための公共の幹線道路になっていたことを知らなかったからである。ボートの多くは陶器、ブラチャンblachang⁴、干魚、そして新鮮なブタ肉を扱う店であった。これらの売り手たちは、ヨーロッパの町なかと同じように、大声で叫び、売り歩いていた。川のうえで忙しく働く者たちのなかには、女性と仏教の聖職者がかなりの割合でいた。後者は髪を剃ってむき出しになった頭と、黄色い法衣によって、すぐに見分けがついた。彼らが施し物の探索〔托鉢〕に出ていく時間だったことが、我々が彼らを多数見かけた理由であった。

朝のうちに、2人の高貴な人物を載せたボートが姿を現した。この2人は大臣の息子と甥で、14歳にも満たない少年であり、我々の到着を出迎える挨拶をするために船上に送られてきた。彼らは果物と上質な茶の贈物を我々のもとに運び、さらに大臣からの要望を伝えてきた。その内容は、船を数百ヤード岸に沿って帆走させると、彼自身の家の向かい側で、総督Governor-generalからの手紙を受け取るために、代表団が船上に送られてくるということだった。大臣の息子は元気で頭の良い少年だったが、かなり甘やかされてきたようだった。彼らはコーヒーと砂糖菓子でもてなされた後、ビンロウジbetelを噛み、たばこを大量に吸ったので、我々はシャムの若い貴族の教育や習慣にかなり好ましくない印象を抱いた。

その日のうちに、待ちかねていた書記1人が乗船してきた。彼は手帳と鉛筆を手を持って

⁴ ガンジス川Gangesの向こうの国々で極めて一般的に使用されており、そして一般的に傷んだエビやその他の小魚で作られている、悪臭のする調味料。

ていた。彼の訪問の目的は、贈り物の1つであるイギリス馬を調査し、陛下に知らせるために覚書を作ることであった。彼は、大臣からではなく王から直接派遣されたことを、ぬかりなく我々に知らせた。陛下はウマのことを聞くと好奇心を抑えることができず、ウマに関する公式の記録を緊急に作成するという目的のために、この人物を派遣したのであった。

夜になると、すでに知らされていた通り、総督の手紙を受け取るために代表団が乗船してきた。その主要メンバーは、外務大臣の代理であるPia-Pipat kosaで、彼は70歳以上の風采の良い老人で、その態度は率直で愉快であった。シャム人とヨーロッパ人の外国使節に関する考え方は、本質的に異なっている。シャム人のあいだでは、主たる敬意の対象となるのは、それを運んでいる外交官ではなく、運ばれてきた手紙である。そしてその外交官は、高貴な使者とほぼ同等の権限を持つと考えられている。総督の手紙を渡す際にはこの状況に注意することと、相応の諸儀式が行われることを確認しておく必要がある。

代表団の長は最初に、シャム人の礼儀作法では、外国からの手紙を国王にお披露目する前に、政府の役人に引き渡さなければならないと我々に告げた。その目的は本物であることを証明し、翻訳することである。我々は写しでは不十分なのかと尋ねた。その返答は、必要なすべての形式が守られていることが確認できるよう、手紙そのものを見る必要があるということであった。これらの形式とは、紙の形や質、封筒、表題などに特別な基準がある。我々はその中で、我々自身が王に手紙を贈る名誉を得られるよう、謁見の前に手紙を返してもらえることを期待していると述べた。これは習慣に反していると告げられたが、手紙が謁見のときに披露され、我々の目の前でシャム語の翻訳が読み上げられるという誓約が与えられた。そこで総督の手紙が出され、年老いた長によって、その目的のために運ばれてきた金の壺に入れられた。これを後甲板の護衛が恭しく受け取り、手渡しでボートのなかに運び、身分を表す傘の下に置いた。

代表団の一員をなしていたKo-chai-sahakは、ほかのメンバーが行ってしまうまで後ろにいた。彼の目的は、その日の夕方に内密に話し合いをしたいという、大臣からのメッセージを我々に伝えることだった。私は少しためらいながらこれを了承した。そしてデンジャーフィールド船長Captain Dangerfieldと私は、夕方6時に上陸し、川岸すぐのところにある大臣の家に向かった。彼は我々に敬意を表して、戸口で我々を出迎え、ヨーロッパ式に我々に手を差し伸べた。彼は絹のクッションに腰を下ろし、反対側を指さし、そこにデンジャーフィールド船長と私が座った。彼の従者や家族は皆、彼から数ヤード以内に近づくときは必ず、極めて威厳のない卑屈な態度で、肘と膝をついて腹ばいになった。我々が迎え入れられた広間は、我々の予想とは裏腹にきちんとしていて、内装がよく整えられていた。窓のカーテンは、イギリスの素敵なチンツでできていた。部屋は切りガラスの立派なイギリスのシャンデリア1対と、いくつかの素敵な中国の提灯で照ら

されていた。

Suri-wrung-kosa、これが外務大臣の名前である。彼は38歳くらいの男性で、どちらかという物々しい風貌で、肥満傾向にあり、肌の色はシャム人としても濃かった。彼の顔つきは分別があることを示しているが、むっつりとしてよそよそしい雰囲気があり、信頼を得ることは考慮していないようだった。身体には装飾をつけておらず、事実、ほとんど服を着ていないといえる状態だった。彼は、腰の周りに巻いた一片の真紅の絹のほかには、何も着ていなかった。全体的に身体も態度も、良い暮らし向きの、商人カーストのつましいヒンドゥー教徒Hindooに見えた。このときの彼の質問は、総じて实际的で要領を得たもので、バクナムの長のときに経験したような、厄介なしつこさは全く見せなかった。彼の主な質問は、使節団の目的に向けられていた。彼は与えられた説明に満足したようだった。彼は、我々が長い旅をしてきたという理由で、数日間休息してから王に謁見するように要請した。しかし彼は、この地の慣習に従って、王の長男で外交と商業の部門を監督するKrom-chiat王子に、事前に我々を紹介することが必要だと付け加えた。我々の会話はマレー Malay語で、Ko-chai-sahakによる仲介を通じて行われた。我々の通訳たちは我々に同行していたが、活動が許可されなかったからである。我々が出発する前に、厳選された果物と菓子、お茶の、非常にきちんとしたデザートが我々に供された。

イギリスのウマに関して、書記によって作成された報告書は、シャム王陛下の好奇心を強く刺激し、彼は正式に贈り物が届くまで、それを抑えることができなかった。そしてウマの上陸許可の要請を伝えるために、丁寧なメッセージが送られた。ゾウたちを輸送するために雇われたボートのうちの1隻が、お供の行列とともに、ウマを受け取りに送られてきて、ウマは昨夜安全に上陸した。これが、この馬種のなかでシャムの海岸に到着した最初の1頭であることに、私は確信を持っている。このウマは美しく完全なサラブレッドthorough-bredであり、体高は約15手尺である。このような動物は、ウマが珍しく、わずかに存在するものも単なるポニーであるような国では、当然のこととして、大層な好奇心の対象となった。

3月31日：午前中、この2年間ポルトガル領事Portuguese Consulとしてシャムに駐在している紳士のシニョール・デ・シルヴェイラSignor De Silveiraが、我々を迎えるために、彼の助手あるいは書記を送ってきた。彼自身が直接来なかったことに関しては、我々が王に謁見するという名誉を与えられる前に、彼の立場にある人物が我々を訪問することは、シャムの礼儀作法に反すると説明してきた。

船上に長期間閉じ込められていた我々は今や、喜んで外に出て行き、そして目の前に立ち現れてくる多くの見慣れないものを見て楽しんだはずだったが、これは礼儀作法に反していた。我々は確かに外出を禁止されてはいなかったが、公式の謁見によって我々が宮廷の直接保護下に置かれる前にそうすることで、民衆から無作法な扱いを受け

るかもしれないと告げられていた。

4月1日：宮廷の特別な要請で、王への贈り物は今朝上陸した。その口実は、謁見の前にこれらを点検して登録する機会を与えることだったが、私は、本当の動機は今すぐ手に入れたという切望に他ならないと思っている。それらを配送しているときに起こった非常にくだらない状況は、シャム政府の役人たちの側の無作法の1例である。贈り物の一品を構成していた、極めて多数のイギリスのモスリンのうち、引き渡し個数が4枚不足していて、パクナムで手渡したリストと数が一致しないと言われた。この「深刻な」不正横領は、公式なメッセージで私に伝えられ、不足分は補われるべきだという希望が示された。同時に、モスリンの10倍の価値があるにもかかわらず、リストに表示されている数を超えて引き渡された、良質のジェノヴァのベルベット2枚に関しては、何の注意も払われなかった！ 我々の事務員が上記の状況を使用者たちに通知すると、モスリンの横領の疑いについてはそれ以上何も言われなかった！

午前中に、朝廷の通訳たちのうち2人が、我々を訪れた。1人はキリスト教徒であり、もう1人はマホメット教徒であった。彼らは極めて自由にお互いの性格について論じ、互いに、もう1人は全く信頼に値しないと我々に保証した。

4月2日：我々一行は昨夜上陸し、我々に割り当てられた住居に入った。それは新しい家屋で、非常に粗いレンガ積みに瓦屋根で、4つの下階の部屋と、同数の上階の部屋からなり、すべてが小さくて不便だった。数日後、似たようなサイズと外観の家が調達された。我々のような一行の宿泊施設としては、今の時点では、部屋を見つけることが困難であったためである。プラ・クランは、シャム人の好みに合わせて我々の部屋を整えてくれてあった。しかし我々の好みにはほとんど合っていなかったので、我々はすぐに自分たちの家具を陸揚げする必要があることに気づき、そうすることによって、我々は状況が許す限り快適な状態を作り出した。我々の新しい住居は、川から数ヤード以内にあった。前方には川と、町の最も人口が多い部分の景色が開けていた。一方で家の背後には、プラ・クランの家の中庭と彼の謁見室が見下ろせた。そのため、我々は過度に好奇心を働かせることなく、時々、そこで起こっていることの大部分を目撃する機会が与えられた。私は今朝、プラ・クランのもとを再度訪問してほしいというメッセージを受取った。私は訪問を断った。彼は最初の訪問のお返しをしていなかったからである。彼は、彼がそうしなかった理由を、公的に承認されるまでは外国の使節たちとの公然の交際をすべて禁止するという、宮廷の礼儀作法に従っていたからだと説明した。

4月3日：我々のKrom-chiat王子との謁見の儀式は、今夜と決められていた。そしてあらかじめ手配されていた通り、夜の8時に、12人漕ぎの御座船が、我々を運ぶためにやって来た。ラザーファード氏だけが私に同行した。ほかの紳士たちは体調がすぐれなかったため、出席できなかった。王子の宮殿は、王の宮殿を少し超えたところ、川の約2マイル上流にある。我々が到着すると、Pia-Pipat kosaによって、控えの間に迎え入れら

れた。彼は年配の役人で、先に、総督の手紙を受け取るために乗船してきたと説明した人物である。我々はその間に長くは留められなかった。まもなく港の管理官が片言の英語でメッセージを伝え、我々は王子の御前に召喚された。港の管理官は現地人キリスト教徒で、このとき初めて会った。我々は2、3段の危険な階段を上って、謁見の間に入った。この部屋の扉に面して、大きな木製の衝立があり、内部を隠していた。この衝立を超えるとすぐに、満座の廷臣のなかに座っている王子が見えた。かなり不思議で印象的な光景であった。広間は長さ約80フィートで、それと釣り合いの取れた幅で、大量の金箔と朱色で覆われていた。その上手端には美しい祭壇の飾りがあり、ゴータマGautama〔仏陀〕の小さな金の像が収められてあると教えられたが、それは真紅のサテンのカーテンによって、我々の視界から隠されていた。我々の左手、部屋の中央あたりには、高くなった説教壇があった。王子が指導を受けたいときには、僧侶たちTalapoynsがそこで彼らの讚美歌を歌い、説法をするということだった。王子は非常に熱心な信者として評判だったので、それは頻繁に行われる。広間はヨーロッパの切子ガラスのシャンデリア、ヨーロッパと中国の鏡、そして多数の中国製の提灯で飾られていた。王子は肥満体形で、38歳くらいだが、外見は50代で、部屋の上手に置かれたマットの上に座り、広間を幅いっぱい仕切っている列柱の1本に寄り掛かっていた。彼の顔つきは賢明で善良そうだった。しかし衣服が少ないので、みすぼらしく、威厳のない外見だった。廷臣たちは遠く離れた場所にとどまり、合掌しながら、地面に身をかがめていた。彼らのなかには、コロマンデル海岸からの移民の子孫である、アリー Ali派のマホメット教徒が何人かいた。これらの人々は、その教育や境遇から、自然と鋭敏かつ策略に長け、シャム行政府の外交部門でかなりの影響力を持っている。廷臣たちのなかで、プラ・クランだけは少し前にいたが、ほかの者たち同様に平伏していた。ラザーファード氏と私は、王子と廷臣たちのあいだの、指示されたカーペットの上に座った。我々の近くには、総督から王子への贈り物があった。我々が座るとすぐに、キリスト教徒である港の管理官が、無礼に近い威厳を込めた調子で、慣習に従ったお辞儀をするよう、我々に指示した。私は彼を叱る必要があると思い、もっと礼儀正しい態度をとらない限り、我々に話しかけるべきではないと言った。これは望んだ通りの効果をもたらした。我々はその午後のあいだ中、二度と彼からしつこく要求されることはなかったからである。

我々の通訳の帯同が約束されていたが、これは守るつもりのない約束だった。王子との謁見に同席を認められることは、彼らのような立場の人間にとっては過分の名誉であり、さらに会話を続けるにあたって極めて不都合な制約だと考えられていた。したがって、彼らが我々について広間に入ろうとすると、従者たちに押され、強制的に撤退させられた。私は、Ko-chai-sahakでさえ、王子に直接話しかけるには十分な身分ではないことを知った。より位が高いもう1人のマホメット教徒が、この目的のために少し前の方におり、王子の言葉を受け取り、我々の背後で平伏しているKo-chai-sahakが、それ

を私にマレー語で伝えた。私は最初に、ヒンドウスタンHindoostanでは、平和と戦争とどちらが優勢であるかと質問された。続けて多数の質問がなされた。それは総督個人に向けられたもので、彼の健康や、どれくらい長くインドを統治しているのか、閣下は何歳か、イギリスの王の兄弟か否か？などであった。これらの質問の答えを得て満足した後、王子は述べた。「私は彼について、近年この国によく通ってくる、あらゆる国の商人たちから、公正で賢明であるという評判を聞いている」。

王子はその後、より重要ではない話題に移ったが、彼がより関心を持っていたのは、約14か月前に、彼が商業的投機のためにベンガルBengalに送った、1隻の船の運命であった。これは我々がカルカッタ、ベナン、シンガポールSingaporeで見た船であり、我々よりも先にシンガポールを離れていたにもかかわらず、まだ到着していなかった。彼は我々がその船を見たかどうか、その船はいつ来るだろうか、またヨーロッパ人の水先案内人が乗っているかどうかを尋ねた。この最後の質問のあと彼は、ヨーロッパ人とインド人のどちらの船乗りが最も熟練していると我々が思うかを知りたがった。その答えは難しくはなかった。そして彼はお世辞を込めて、「私がヨーロッパ人一般について話す時は、イギリス人を意味するのではない。なぜなら、この点に関して彼らがその他すべての人々よりも優秀であることはよく知られているのだから」と説明した。今紹介した話題に関する1つの質問は、笑いを誘うことを意図したものだ。王子は、カルカッタに滞在中、シャム船の司令官がイギリス風の服を着ていたかどうか、ヨーロッパ人の作法や習慣に従っていたかどうかを知りたがった。外国の作法に従うことを期待された人物は、扱いにくい60歳の高齢のマホメット教徒で、最も頑固な東洋気質の持ち主であった。

次の質問はヨーロッパの政治に少し関連するもので、王子はとくに熱心に、イギリス人とポルトガル人は現在平和な状態にあるかを知りたがった。これにはすぐさま、イギリス国民とポルトガル国民は互いに長年の友人であり味方である、そしてこのことはずっと続いていくはずだという返答がなされた。シャム人は当然のことながら、ポルトガル国民の力を過大に評価している。それは、常にほかのどのヨーロッパ人よりも多く、彼らについて見聞きしてきたからである。そしてこのことが現在の質問の理由であった。

この後我々は、シャムを離れた後はどこを目的地としているのか？と尋ねられた。この質問は、使節団の本当の目的を説明する機会となった。王子はこれに対してお世辞の調子で、「インド総督にとって、遠い国々との友好と商業を求めることは賢明である」と述べた。

これらのほかにくだらない、重要でない質問もなされた。使節団を構成する各紳士の年齢、彼らの在職期間や仕事の内容、ヨーロッパとインドの言語の数、彼らはそのうちどれを学んだか等々。謁見は2時間近く続き、夜の11時から12時のあいだによりやく終わった。我々は後に気づいたのだが、シャム人のあいだでは、交渉にはこのような遅い

時間帯が好まれている。この訪問のあいだに我々に食事は供されなかったが、家に帰ると8つの大桶に入った砂糖菓子が、王子からの贈り物として届けられていた。

4月5日：王が我々に謁見を賜る日は8日に指定されており、今日はかなりの規模の、我々の紹介の儀式が予定されていた。我々の住居から王宮の向かいにある船着き場まで我々を運ぶために1隻の御座船が送られること、船着き場からは輿で運ばれることが決まっていた。私はゾウたちを希望した。しかしゾウたちの使用は、この国の首都以外の全地域では極めて一般的であるが、近代の首都では長いあいだ行われていないこと、少なくとも政府の主要な役人の少数を除いて禁止されていたことがわかった。また騎馬は尊敬されないこともわかった。我々はこの問題の議論のなかで、シャム人の奇妙で度を越した国民的虚栄心の顕著な例を経験した。この人々は、半裸で奴隷化された野蛮人 half-naked and enslaved barbariansでありながら、自分たちを世界で一番の国民とみなし、異邦人に対して従属する役職の仕事すべてを降格とみなす厚かましさを持っていた。我々のシャム滞在中に、この種の例が百はあった。そして今回に関しては、非常な困難があり、長たちの側の最大限の抵抗があったが、彼らはずいに、数人の担ぎ手が我々の輿を運ぶことに同意した。

私は謁見の際に我々が要求されるお辞儀の種類について非常に困惑し、危ぶんでいた。しかし全体として、この問題については何も特別な困難が生じないように手配されていた。シャムの役人たちの側でも、我々が自国の習慣に固執し、彼らの習慣を軽視することで、侮辱を与えるのではないかと非常に心配していた。拝謁に臨んで、我々はヨーロッパ風のお辞儀をし、外国の使節団が通常指定される場所に座り、着席の際に合掌した手を額に挙げて陛下に挨拶をし、我々の足や下半身のどの部分も、シャム王陛下の聖なる目に入らないよう特に気を付けるということが、最終的に決定された。

4月7日：昨日の夕方、プラ・クランから私に緊急の連絡があり、かなり重要な話があるので、儀式に出ないで彼の家で会うよう、私に懇願してきた。私は現段階で、使節団の邪魔になるような、不必要な障害物が出てくるのは極めて不本意だった。そこで、彼の願いを承諾することにした。私は今朝、フィンレイソン氏と一緒に彼を訪ねた。彼の希望は、謁見に先立って、シャム人によって英国国民に与えられるであろう商業的利益の見返りとして、シャム人の念願のうちどの事項が、我々の側から認められるかを知ることだった。この点について彼は、インドの総督とのあいだに1つの条約が結ばれたら、シャムの船はイギリスの港で自由に銃や弾薬を購入できるのか？と、率直に尋ねた。この質問への回答は、もしシャム人が英国国民の友人や隣人と平和な状態であるならば、我々の港で銃や弾薬を購入することが確かに許可されるだろう、そうでない場合は許可されない、だった。これはあまりにも明白にビルマ人のことを言っており、通訳はそれを説明するのをためらった。そして私に向かって小声で、シャム人の認識では、国の敵に関して何らかの言及をするのは無作法だと考えられていると教えた。これら2国民が互いに

抱いている、深い恨みと妥協を許さない気分を示した見解であった。厳格な中立性とはほとんど両立できないような、銃を彼らに供給せよというこの要求は、交渉全体のなかでシャム人が最も価値を置いている点で、私は自分自身にこれを許可する権限は与えられていないと感じていることを、大変に遺憾に思った。大臣は貿易の問題について打ち解けて話し始め、それに関して彼が賢明で事情に通じていることを明らかにした。しかし彼の見解は抜け目ない商人のものであり、政治家のものではなかった。彼は、危険を冒してベンガル貿易をすることに利益を見出したことがないと不平を言った。航海に18か月も費やし、カルカッタで無神経な現地人代理人に商品を預けるのだから、それはなんにも不思議なことではなかった。そして彼は、シャムが外国貿易向けに提供する様々な産物について詳しく論じ、アメリカ人たちが勧めたので、コーヒーの栽培を開始したと述べた。私が彼のもとを辞する前に、彼は再び我々による銃の供給というご執心の話題に戻り、私は先と同じ返答をした。

我々はこの午前中に、真実か否かは判定できなかったが、中国人がさかんに使節団の目的を歪曲して伝えていると知らされた。イギリス人はやって来ると貿易だけを望むふりをして口当たりのよい言葉を話し、そして少しすると商館を1つ要求し、その次に周囲に城壁を建てる許可を求め、彼らはやがてこの城壁の上に大砲を置くだろう、そして最後に彼らは国を制圧するだろう、彼らはすでに同じようなことを何度もしてきたのだと言っているとのことだった。またさらに、イギリス人は今ヒンドゥスタンで戦争をしていないので、動員可能で稼働先を求めている大きな軍隊を持っているということも付け加えられていた。これは否定できないが、我々のインドにおける強大化の奇妙な歴史は、常に近隣諸国民の嫉妬の対象となり、我々の最も称賛に値する計画や企画さえ歪曲する根拠となってしまうのである。

4月8日：王に我々を紹介する儀式がこの日に設定されていたので、我々は朝8時半過ぎに住居を出て、王宮に向かった。深紅色の制服を身にまとった12人の漕ぎ手の御座船が、使節団の紳士たちを運ぶために、宮廷から提供された。我々のインド人従者約20人のために、もう1隻が提供された。そして護衛のセポイsepoysたちは、船のランチで運ばれた。我々の下僕、とくに護衛のセポイを行列の一部に加えるようにと、特別な要求がなされていた。9時頃、我々は王宮の外壁の下に上陸した。そこには、この光景を見ようとする人々が、巨大な群衆となって待ち構えていた。我々を王宮に運ぶための乗り物は、網のハンモックからできていて、棒から吊り下げられ、刺繍されたカーペットをそなえ、この国の習慣に従って、男性2人のみで運ばれた。この不安定な乗り物の扱いはいささか困難で、我々のごちなさは群衆をいくらか楽しませた。護衛は、上陸地点で我々に敬礼した後、整列して、行列の一部になった。第1の門を通った後、我々は広大な市場に来た。どこも人々で混みあっていた。これは第2の門まで直接続いていた。そこではシャムの兵士たちが一列になって道を作り、我々を迎えた。外見は極めて異様

であった。彼らの衣服はアジア風でもヨーロッパ風でもなく、両者が奇妙に混ざっていた。彼らの制服は、次のような構成であった。粗い深紅のブロード生地、前をボタンで留める緩いジャケット。膝まで届かない、短くゆったりとしたズボン。小さな丸いクラウンと幅の広いつばの帽子。それは赤い染料かニスでコーティングされており、剣に対して防御力があるという犀皮からできている。彼らの武器はマスケット銃と銃剣で構成され、彼らの帽子と同じように、厚い赤いニスでコーティングされていた。マスケット銃の何丁かは柵杖がなく、有効性という点で非常に粗末な状態であった。

第2の門で我々は輿から降り、これ以上先に行くことが許されていない護衛をそこに残した。我々もまたこの場所で、着装武器を手放すよう強いられた。何人たりとも、王の居住区域に隣接するなかに、武器を身に着けて入ることは許されないとされた。この門をくぐると、両側に小屋が並んでいて、その中に巨大な大砲が置かれている大通りに出た。この大通りにも、我々を迎えるために、前に説明したものと同じようなシャム兵の道が作られていた。我々はこの大通りから少し脇の、巨大な広間のなかに案内された。その広間は長さが80フィートか90フィートはあり、幅は40フィートから50フィートあるようだった。これは主たる裁判の間であったと思う。しかしハトやツバメ、スズメが屋根に巣を作り、彼らを妨げることなかれという宗教的な格言のように、恐れることも遮られることもなく飛び回っていたので、人がよく訪れるようには見えなかった。この建物の近くには10頭のゾウが、飾り立てられて引き出されていた。我々は到着後初めてゾウを見た。

我々のために絨毯が広げられ、王の御前への呼び出しを待つように言われた。20分も待たされないうちに呼び出しが届き、我々は謁見の間に進んだ。王宮の囲いのこの部分は、我々が通ってきたほかの部分のように、群衆で満たされていた。彼らは好奇心旺盛で騒々しいが、無作法ではなかった。白い杖を持った数人の役人が、群衆を遠ざけるために控えていた。そして2人の役人が、先触れする仕草の後、我々を先導した。我々はずいぶん、第3すなわち最後の門についた。そのなかには主要な宮殿が含まれていた。それは高い尖塔がついた建物で、錫の屋根がついていた。謁見の間は、宮殿とは別であった。そして広大な仏陀の寺院があった。ここで我々は靴を脱ぐように、そして我々のインド人従者たちをそこに残すように求められた。使節団の4人のイギリス人将校を例外として、我々の一行の誰一人として、この地点を超えて進むことは許されていなかった。私はあらかじめ、我々の通訳たちは、御前に入ることは認められていないにしても、なかで話を聞いてよいという保証を得ていた。しかし、あわただしい瞬間に彼らは押しのけられ、邪魔されてついてこれなかった。我々が門を入るとすぐに、100人以上からなる音楽隊が、我々の歓迎のために道を作って整列しているのが見えた。楽器はゴング、ドラム、金管フルート、そして縦笛で構成されていた。

謁見の間の扉の反対側には、多くのパーツで構成された、巨大な中国の鏡があって、

衝立をなし、宮廷の内部を我々の目から隠していた。我々がこの地点に着くとすぐに、大きな管楽器の音が聞こえ、一緒に激しい叫び声をした。後になって聞いたののだが、陛下のご到着を告げるものであった。我々は衝立を右手にして通り過ぎた。そして、あらかじめ承諾してあった通り、我々の帽子を外し、ヨーロッパ風の礼儀作法にしたがって、恭しくお辞儀をした。我々が今入った大きな広間の足元いたるところでは、平伏した廷臣たちが文字通り込み合っていたので、身分ある役人を何人か踏みつけないで動くことが難しかった。このような場合は、玉座からの近さによって、優位が決められていた。王子たちはその足元の近くに、政府の主要な役人は彼らの次、御前に入ることが認められた最も低い地位の役人へと、順に続いていった。我々は衝立の少し前に座り、廷臣たちと一緒に、玉座に向けて3回のお辞儀をした。このお辞儀は、合わせた手を頭まで3回持ち上げ、毎回額に触れることで構成されていた。シャム風のお辞儀を完成するには、体を地面に向けて曲げ、平伏する度に、額を地面に触れる必要があった。私は、我々に割り当てられた場所は、それほど目立った場所ではないが、許可されたなかでは最高の場所だと思った。しかし、我々がお辞儀をするや否や前に進むように求められ、最終的に玉座に向かうなかほどで落ち着いた。我々に最初の場所を指示し、その後さらに名誉ある場所に進むよう指示したことは、明らかに、我々自身がすると誓ったより多くのお辞儀を強いるための、我々の案内人の戦略であった。我々が2回目に座った時、宮廷全体が3回の追加のお辞儀をし、我々は粗野という汚名を避けるために、それに参加せざるを得なかったからである。

謁見の間は長さが約80フィート、幅がおそらくその半分、高さが30フィートの、均衡のとれた広々とした大広間に見えた。10本ずつの美しい木柱が2列になって、扉から謁見の間の上手端に位置する玉座までの通りを形成していた。壁と天井は鮮やかな朱色に塗られていた。前者のコーニスには金箔が張られ、後者には豊かな金箔の星が厚くちりばめられていた。柱の間にはイギリスの切子ガラスの良いシャンデリアがいくつか見えた。この部屋は、いくつかの貧相なブリキのランプが柱に面して置かれていることを除けば、総じて趣味が良いものだった。これらはバタヴィアBataviaから輸入されたもので、外国製というだけで珍重されていたようだった。

玉座とその付属物が、広間の上手端全体を占めていた。前者は全体に金箔が張られていて、高さは約16フィートであった。それは美しい説教壇に形と見かけが見ていた。黄色地に金銀紗のカーテン1対が、玉座を除いて、部屋の上手部分全体を隠していた。そしてこのカーテンは、使われていないときは、玉座の上にも引かれているようになっていた。玉座の前には金箔を貼った大小さまざまな傘が、床から立ち上がっているのが見えた。これらは一続きの天蓋をなし、上に行くほど大きさが小さくなり、ときには17層も重なっていた。玉座に座って現れた王は、生きている存在というよりも、壁龕に置かれた彫像のように見えた。彼は非常に広い袖の、金の布地でできた緩いガウンを着てい

た。彼の頭には王冠もその他の飾りもつけていなかった。金の棒か笏が彼の近くにあった。

謁見の間の一般的な外見、平伏した廷臣たち、王の姿勢、そしてそこに広がる静けさは、非常に印象的な光景で、世俗の君主の謁見の間というよりは、何か厳肅な宗教儀式を行う修行僧で混みあった寺院を想起させた。

王は50歳から60歳のあいだの男性で、どちらかというとも背が低く、肥満傾向にあった。彼の顔立ちはごく普通で、よく知られている彼の怠惰と痴愚の性格 the known indolence and imbecility of his character を示しているように見えた。しかしこの点に関して正しい見解を得ることは、我々がいた場所から玉座までの距離のために、そして一種の陰影の効果のために、容易ではなかった。

玉座の左側に、総督からの贈り物のうち持ち運びできるものが展示されているのが見えた。1人の書記が進み出て、これらの目録を読み始めた。私はそれらが貢物あるいは捧げ物と表現されたと確信しているが、それについては確証を得ることができなかった。総督の手紙は、その点について明確な誓約が与えられていたにも関わらず、読まれることも披露されることもなかった。

シャム王陛下が我々に向けられた言葉は重々しく、慎重に、神託のように言い渡された。国家の第1の役人たちの1人がそれを下位の1人に伝え、そしてその人物が我々の背後にいる Ko-chai-sahak に伝え、彼がそれらをマレー語で説明した。我々に向けられた質問は、次のようなものだった。「インド総督（シャム語では文字通りベンガルの領主または知事）があなたをシャムに派遣した。あなたの用件は何か？」返答として、使節団の目的が簡潔に説明された。「イギリス王の理解を得てここに派遣されたか？」それにはこう説明された。イギリスは非常に遠いので、東の遠く離れた国々との政治的な交流については、一般的にはインド総督に一任されている。「インド総督はイギリス王の兄弟か？」この質問に対しては、インド総督は幼少時から彼の主君の個人的な友人であったが、兄弟ではないと返答された。その後は立て続けに質問が出された。「王と総督の年齢差は？」「あなたがベンガルを発った時、インド総督は健勝だったか？」「あなたはシャムを発った後、どこに行くつもりか？」「あなたが訪問しようとしているすべての国で、和親があなたの目的か？」「サイゴン Sai-gun からターラン Turan までは、陸路か水路かどちらで行くつもりか？」「あなたはコーチシナ Cochin China の首都フエ Hué を訪問するつもりか？」これらの様々な質問に対する返答を受けた後、王は次のように締めくくった。「インド総督からの使節に会えてうれしい。何か言いたいことがあれば、Suri-wung-kosa 大臣に伝えよ。我々があなた方に求めているものは主に銃である。」

王がこれら最後の言葉を発するや否や、まるで、杖を羽目板に当てたような大きな打撃音がした。すると玉座の両側のカーテンが何人かの姿を見せない係によって動かされ、玉座の上で閉ざされた。これに続いて我々が入場したときと同じ管楽器の音と激しい叫

び声がした。そして廷臣たちは顔を地面に落とし、6回続けて平伏した。合意してあった通り、我々は体をまっすぐにして座り、3回お辞儀をした。

陛下の上にカーテンが閉ざされるや否や、廷臣たちは初めてまっすぐに座り、我々は楽にするよう、そして周囲を自由に見まわし、「宮廷の豪華と壮麗を称賛するように」求められた。通訳はそれに近い言葉を使って、我々にこのことを伝えたのである。

謁見のあいだに激しい雨が降り、まだ降り続いていた。陛下はこの機会に、我々それぞれに小さな傘を与え、余暇に宮殿のなかの珍しいものを見てほしいというメッセージを送ってきた。謁見の間の入口につくと、中庭と通路が雨でひどく濡れて汚れているのに気付いた。我々は当然、最後の門のところに置いてきた靴を要求した。これは許可され得ないものであった。我々が今いる神聖な囲いのなかでは、血筋の第1王子たちも、靴を履くことはできないと告げられた。不快感をはっきり示したり、抗議を試みたりするのは賢明ではなかったであろう。ゆえに我々はこの不便な慣例を喜んで受け入れるふりをし、我々の好奇心を満足させるために進んだ。

我々が最も注意を向けた珍品は、白ゾウであった。仏陀の宗教が優勢であるすべての国々で、それが崇拜の対象ではなくても尊敬の対象であることは、ヨーロッパでは良く知られている。現在の王は6頭も持っている。それは歴代のどのシャムの君主が所有していたものより数が多い。そしてこの状況は、彼の治世にとってとくに縁起が良いと考えられている。そのうちの4頭が我々に披露された。彼らは私が想像していた以上に純白に近かった。事実彼らは皆、多少なりとも鮮やかで淡い色をしていた。しかしそれは、そのゾウが生まれつき覆われている毛の量が少なく、肌が露出していることによるものだった。彼らには病気、虚弱あるいは欠点の兆候はなかった。大きさは普通の体格で、最も小さいものでも高さ6フィート6インチ以上だった。彼らの来歴を尋ねたところ、彼らはすべてラオLao王国、またはカンボジアKamboja王国から来ていて、シャム自体やその朝貢国であるマレー諸国から来たものは1頭もいなかった。後者は事実、白ゾウを提供したことはない。

白ゾウの希少性は、疑いなく、それが尊重される原因である。白ゾウが発見され、事実その国内では総じてゾウが最も完全な状態で存在し、最も尊敬されている国々は、仏陀の信仰と輪廻の教義が普及している国々である。このため白ゾウのように極めて稀なものの身体は、非常に強力な人物の魂が完成に向かって進化する途中の仮の住居であるに違いないと想像することは、自然なことであった。これが現在の信仰であり、ゆえにすべての白ゾウは1人の王の位と称号を持ち、「純粋な王」や「素晴らしい王」などといった、その尊厳を表す適切な名前を付けられている。イエズス会士の1人がこの点について書いていて、シャム王が白ゾウに乗らないのは、白ゾウが自分自身と同じくらい偉大な王だからだと、いくらか単純に我々に告げている。

我々が見たゾウたちはそれぞれが別々の小屋を持ち、そこには10人以上の飼育係が仕

えていた。雌雄のゾウがいるため、雄の牙は金の環で飾られていた。頭には金の鎖の網がつけられ、背中には小さな刺しゅう入りのベルベットのクッションがつけられていた。

白ゾウたちはいくつかの点で尊敬されているにもかかわらず、時に罰を受けなければならないこともあるので、シャムではそれほど寛大に扱われているようには見えない。彼らのうち2頭はあまりにも凶悪で、披露するのは安全ではないと考えられていた。1人の飼育係は、我々の目の前で、1頭の足を鋭い鉄で血が出るまで刺した。しかし陛下が犯した唯一の罪は、バナナの房を盗んだことだった。というよりはむしろ、許可を与えられる前にひったくってしまったのである！

白ゾウの小屋のなかで、我々は2匹のサルを見せられた。飼育係の主張するところでは、このサルの存在が、王から彼らが預かったものを病気から守っていた。この2匹は完全に純白で、かなりの大きさがあり、長い尻尾を持つサルの1種であった。彼らは完璧な健康状態で、捕らえられてから長い時間が経っていた。しかし我々は、彼らと遊ばないほうが良いと助言された。なぜなら彼らは不機嫌でいたずらな性質だからである。これらはメナムを上流に10日ほど旅したところにある、ピッサヌロークPisilokの森で捕まった。

我々は白ゾウたちのもとから、彼らの同胞の群れのもとへ連れていかれた。彼らは不運にも黒く生まれ、そのために骨を折って働くことや、辛い待遇が運命づけられていた。彼らは大きさも美しさも、どちらも際立っては見えなかった。しかし我々よりも優れた審判者たる我々のインド人下僕の何人かは、彼らが極めて高い程度で、愛好家たちが称賛するような、そしてこの動物の最も高貴な種族と識別されるような、すべての点を具えていると考えた。

部分的に、つまり主に頭と鼻のあたりが白い、多くのゾウが印象的だった。これらのうちの1頭は別の厩舎で飼われており、頭全体と鼻が白かった。それは高さ8フィートで、ほぼ完全な左右対称だった。これは白ゾウの何頭かと同じように、ラオの森で捕獲された。陛下が常に乗っているゾウは、その他のゾウと一緒に披露された。それは背が高く、非常に従順だが、美しさはそれほどでもなかった。

シャムの陛下のウマの飼育場を一瞥するだけで、我々の好奇心は十分に満たされた。それは東の島々 Eastern Islandsから輸入された数頭のポニーと、中国の雲南Yu-nan地方から連れてこられたという、小型種のウマからなっていた。西インドWestern Indiaから来た数頭のウマがいたが、年老いていて、みすぼらしかった。それらのうち1頭は、プリンス・オブ・ウェールズ島Prince of Wales's Islandの初代総督Governorであった、ライトLight氏の贈り物だと紹介された。

我々は通りすがりに、入るときに見た大砲を検査するよう求められた。それらは台座の上に据えられた7か8基で、単なる珍品に過ぎなかった。いくつかは長さ18フィートで、側面は極めて分厚いが、口径は9インチを越えなかった。それらは完全にうまく铸造さ

れているように見えた。それぞれには銀で象嵌された刻印があった。我々が聞いたところでは、それは火薬の量が記されているということであったが、我々が理解できたことからすると、誇張された言葉だった。これらの砲は、大きさという点ではヒンドゥスタンのマホメット教徒の諸侯によって鑄造されたものとは比較にならず、そして大きさも技量も後に我々がコーチシナで見たいいくつかとは比較にならなかった。

我々は今、ゴータマの偉大な寺院に連れていかれた。これは、ほかのすべてのシャムの寺院と同様に、広大な正方形の囲いで構成され、1つの主要な寺院と、いくつかの従属する寺院が含まれていた。柱廊と屋根付きの通路1つが全体を囲んでいて、その壁はシャムの紙で覆われ、その上に描かれた絵は、仏教徒諸国民のお気に入りの題材である、ラーマRamaの冒険を表している。主要な寺院は広々とした正方形の部屋で、その一方の端は高さ約8フィートの一種の祭壇になっていて、多数の金箔貼りの仏像がその最も一般的な表現、すなわち座像にして置かれていた。それらの金箔貼りの像の中央には、緑色の石で作られた高さ約18インチの、同じ神の像が1つ立っていた。我々の案内人はエメラルド製であると断言したが、その素材はエメラルドや何かほかの宝石にも少しも似ておらず、非常によく磨かれているにもかかわらず、くすんでいて不透明であった。これは調査の手が届かないものであったが、中国から輸入された明るい色のマラカイトである可能性もなくはない。

我々のこの寺院の調査は急ぎのものであり、私はそれに関してより詳しい記述をするつもりはない。なぜなら我々は後に、同じような特徴を持つ、しかもより大きな規模のほかのシャム寺院を調査し、叙述するより良い機会を与えられたためである。しかしながら私はシャムの寺院を最初に見たときに、強い印象を持ったと言明すべきである。その建物の大きさと、細工と素材に労力と費用が掛かっていることを見ると、我々は、文明においてかなり進歩し、独裁的な政府と迷信深い聖職者に支配されている多数の人々のなかにいるのだと感じざるを得ない。

披露されるままに王家の珍品を見た後、我々は謁見の前に最初に休憩をとった広間に戻された。そこには我々のために食事が用意されていた。それは豊富なドライフルーツとシャムの砂糖菓子で構成されており、非常に手際よく礼儀正しく供された。

この食事にあずかった後、我々は入ったときと同じように賛辞と注目を浴びながら来た道を引き返し、正午ごろに家に着いた。すなわちすべての出来事は3時間半程度であった。

我々が家に着くとすぐに、王が派遣した役人たちが、丁重なメッセージとともに、大量のシャム菓子と、20から30桶の中国のドライフルーツと砂糖菓子を持ってきた。またこのとき、Suri-wung-kosa大臣が午後到我々を訪問すること、そして我々の家で我々を接待し、宴会を催すように指示を受けていることを知らされた。

この訪問はシャム人の最も風変わりな突飛な迷信の一つを観察する機会となった。この人々は何か頭上を通り過ぎるのを許したり、頭に触れられたり、つまり彼らの身体

が物理的に他者の身体の下になってしまうような状況に自らをおくこと、例えば橋の下を行ったり、上階に誰かが住んでいるときにその家の下階の部屋に入ったりするようなことを極度に恐れていた。この理由から彼らの家はすべて1階建てである。しかしながら我々の住居は倉庫にすることを目的にして建てられたもので、すでに述べたように2階から構成されており、不便な階段と落とし戸を通らずには、下の部屋から直上の部屋に入ることはできなかった。これは大臣にとって深刻なジレンマとなった。彼のような地位の人間が異邦人に自分の頭の上を歩かれると、公的な評判を深刻に傷つける事態に陥ってしまうのである。

この重大な困難を克服するために、最終的には家の側面に梯子がかけられ、閣下はこのような冒険に向いた軽く活動的な体形ではないにも関わらず、これを通して、午後3時ごろに安全に上階に上った。ポルトガル人の子孫の現地人キリスト教徒が準備したヨーロッパ風の豊かな接待が、今我々に供された。大臣はテーブルに着いたが、食事はしなかった。私が以前述べた若者たち、すなわち彼の息子と甥も座って、彼らの前に置かれた御馳走を堪能した。肉の選択に東洋的な禁忌は見られなかった。ブタ、ウシ、シカ、家禽が大量に供された。そこには我々が、殺生が恐怖の目で見られたり、犯罪として罰せられたりする国にいることを示すものは何もなかった。実際のところシャム人の習慣では、彼らが率直に認めているように、彼ら自身の頭の上に血がついていなければ、極めて満足して、何でも遠慮なく、与えられた動物性食品をためらいなく食べる。

我々がテーブルに座っている間、大臣は一般的な性質の質問をいくつかした。彼は尋ねた。この使節団の情報はイギリス王に伝えられるのか？ これに対して私は答えた。インド政府のあらゆる業務の詳細情報は、定期的にイギリスに伝えられている。この説明を聞いて彼は、イギリス王は今回の使節団の結果を聞いたときに、シャム王に手紙を出すであろうかと、はっきりと尋ねた。私は答えた。イギリス王陛下は彼の権威をインド総督に全体的に委任しているが、シャム王がとくにそれを望んでいるなら、直ちに彼に手紙が送られるはずである。これらおよび謁見中に出示された同様の質問は、シャム政府のプライドが要求するものである。シャム政府は明らかにインドの委任政府との対等な関係を維持することをためらい、君主との直接的な交流を求めている。極東の王侯たちは、東インド会社をそのようなものとしては認知していない。説明を試みても、商人の集団に広範な政治権力を委任するというのを、彼らは理解できなかった。「会社 Company」という英単語を頻繁に使うヒンドウスタンの現地人たちですら、この単語の意味するところはまさに政府の力、あるいはイギリスによって行使される至高の政治的権威にほかならないとしている。

我々が朝に受けた謁見に関して、Suri-wung-kosaはこのような見解を述べた。国王が朝に我々を謁見した後、我々はシャムを訪れたことをとても喜んでいると確信している。そして彼はこう付け加えた。「あなた方はほかの国々を訪れようとしている。そしてそ

ここで歓迎をうけたとき、シャムの宮廷からあなた方に授けられた名誉の真価を確認する機会を得ることになるだろう。」そして大臣は、陛下が将来的に使節団の経費を支払うであろうことを今ここで我々に知らせたいと言った。そして240ティカल्ティカ⁵が入った銀のボウルが1つ、かなりもったいぶって、テーブルの上に置かれた。そして私は、我々の一行全体の1か月分の手当として、このお金を受け取るように求められた。この金額がわずかなもので、この使節団に配置された人員の通常の48時間の消費額にかろうじて足るくらいだったとは、シャムの役人たちは思いもしなかったと私は確信している。反対に彼らは、自分たちが格好良くふるまったと考えているに違いない。この政府は自身の役人たちに対して、それがたとえ最も信頼を置いている者たちであっても、このような卑しく哀れむべきやり方で報いるのが常なのである。そしてそれは一言でいうと、政府と人々の双方が真に貧しいということなのだ！ 私は、私たち全員が自国の政府から十分かつ寛大に報酬を与えられていること、そして公的な立場にある個人が外国人から、あるいは公務の対価としてお金を受け取ることは禁じられていることを説明すべく努力した。しかしながら結果的には、古くからの慣習に従って、かつ不興をかうことを防ぐために、シャム王陛下の賜金を受け取らざるを得なかった。陛下の贈り物は、その量や性質がどうであれ、それを受け取る人にとって大きな名誉となると考えられており、それを拒否することは、彼の臣下たちから冒涇同然の行為とみなされかねなかった。

この訪問中のSuri-wung-kosaの態度は、とくに好感の持てるものではなかった。彼の態度は冷淡で、上品さや威厳もなかった。彼に同行してきた下級の者たちに対しては、彼は粗野で無遠慮だった。この人々は主にキリスト教徒とマホメット教徒で構成されており、その待遇はあまりうらやましいものではなかった。前者はポルトガル人通訳で構成されており、港の管理官ですら、テーブルでは従僕として我々に仕えていた。そして後者は、彼らのブタ肉とワインに対する偏見に関する閣下の悪い冗談を楽しむふりをしなければならなかった。彼はそれらを食べるよう、彼らに強いたのである。

(2022年度外国語演習P受講生、本学教授)

⁵ 1ティカルは半クラウンに相当する。

